

TBSドキュメンタリー史上 最大の**問題作**が、 半世紀の時を経て現代に蘇る

1967年2月9日、劇作家の寺山修司が構成を担当し、街頭インタビューのみで構成されたドキュメンタリー番組『日の丸』がTBSで放送された。街ゆく人々に「日の丸の赤は何を意味していますか?」「あなたに外国人の友達はいますか?」「もし戦争になったらその人と戦えますか?」といった、人々が普段考えないような本質に迫る挑発的な質問を、次々とインタビューしていく。放送直後から抗議が殺到、閣議でも偏向番組、日の丸への侮辱として問題視され、郵政省電波管理局がTBSを調査するに至った日くつきの番組である。「現代に同じ質問をしたら、果たして?」ドラマ制作部所属で、本作が初ドキュメンタリーとなる若干28歳のテレビディレクター佐井大紀は、2つの時代を対比させることにより「日本」や「日本人」の姿を浮かび上がらせようと、自ら街頭に立った。

我々、「日本人」の正体に迫る一

1967年。それは日本で初めて建国記念の日が施行された年であり、東京オリンピックの3年後、また、その3年後の1970年には人類の進歩と調和をテーマに掲げた大阪万博を控える、高度経済成長真っ只中。2022年もまた、前年には東京オリンピックが開催され、3年後の2025年には大阪万博を控える。60年代当時、ベトナム戦争という不安が世界を覆っていた。近年はロシアによるウクライナ侵攻やコロナパンデミックの脅威が世界中を脅かし続けている。

1967年と2022年。この偶然にも類似した2つの時代を舞台に、
人々の胸の内にあった声を対比していく。

映し出されるのは、過去、そして現代の日本と日本人の姿。インタビュー対象者の生々しい表情と戸惑いは、いつしか観るものの戸惑いへと変わっていく。当時スマホはもちろん、PCさえも存在していない時代。テレビも白黒の映像からカラーの映像へと変わり、高度経済成長は高齢化社会へと変貌した。果たして、55年という決して短くない時間は日本と日本人にどのような変化をもたらしたのか、何が浮き彫りになるのか。

没後40周年、 寺山修司が改めて問う“ニッポン”

「国家」とは何かを追い続けていた寺山修司が、テレビという公共の電波を使った壮大な実験が『日の丸』だった。過激な詩的なものは、虚構の空間を生み出し、一人一人の内面・真実を映し出していく。

当時、寺山は何を考えていたのか? なぜ、テレビのタブーに触れる

『日の丸』を制作したのか。その意志は受け継がれ、今一度我々に問いかける。

「日の丸」とは、「国家」とは、そして“日本”とは? 予想外の急展開に我々はきりきり舞いしながら、テレビの限界に挑んだ人々の思いに触れ、激動の現代における自らの存在に気づかされる――。

没後40年となる2023年、観る者を圧倒する「むき出し」のドキュメンタリーが誕生した。

2.24 FRI

あなたにとって、
日の丸とは何ですか?

ビックカメラ上(読売会館8F)
JR有楽町駅 国際フォーラム出口前
角川シネマ有楽町
03 (6268) 0015 www.kadokawa-cinema.jp

渋谷・文化村交差点左折
ユーロスペース
EUROSPACE
03 (3461) 0211 eurospace.co.jp/

吉祥寺PARCO B2F
UPLINK 吉祥寺
0422 (66) 5042 joji.uplink.co.jp

観賞後、
漠然は確信に
変わる—



寺山修司40年目の挑発 HINOMARU



監督:佐井大紀

企画・エグゼクティブプロデューサー:大久保竜 チーフプロデューサー:松原由昌 プロデューサー:森嶋正也、樋江井彰敏、津村有紀
総合プロデューサー:秋山浩之、小池博 TBS DOCS事務局:富岡裕一 協カプロデューサー:石山成人、塩沢葉子

製作:米田浩一郎、安倍純子

製作:TBSテレビ 配給:KADOKAWA 宣伝:KICCORIT 2023年/日本/87分/5.1ch/16:9 ©TBSテレビ
hinomaru-movie.com

観るものを圧倒する「むき出しのドキュメンタリー」が誕生

